書籍「不登校という生き方」を読んで

書評が目に止まり、「不登校という生き方－教育の多様化と子どもの権利－」を購読した。

著者は、我が子の不登校が切っ掛けで長年の教員生活を辞めて今でいう「フリースクール」の先駆者として取り組み始め、「フリースクール」問題の現在までの２０数年間の苦闘の集大成の本である。

著者は、今の「学校教育が、競争、管理、押しつけに満ちており、それに対するせっぱ詰まった子どもの生命反応が不登校として現れている」とみる。

確かに、学校に行か（け）ないことを理解して貰えず「学校に行け！」と毎日親からも叱られると、心の居場所がなくなり生命反応としての苦痛から逃れるために、先日の報道のような家族さえも犠牲にするような事件が起こるのかなあと思える。

著者は、学校教育を拒否、否定してるのはなく、子どもの権利である教育を受けるとは、何もいわゆる学校教育に限らず、多様であっていいのでないかという。

まだまだ、日本の社会は「学校には行くもの」との呪縛に縛られ、その犠牲が、不登校児と云われる。

例えば、不登校は、子どもの学校（教師）への拒否反応なのに、なぜその子どもに拒否されるかの検証をしないで、不登校気味の子どもが親と一緒に校門をタッチすると、出席扱いにするなど、大人の勝手な論理の学校教育の形骸化も甚だしい。親もそれで出席扱いで卒業できると思うとすれば、正に呪縛の産物。

こうした大人の論理の身勝手さのどこに、子どもの教育を受ける権利保障があるというのであろうか。

こんな形骸化した学校教育より、子どもが主体に活動し、子どもが生き生き活動するフリースクールやホームエデュケーション等が、子どもが教育を受ける権利の選択肢としてあっていいのでないか、こうした多様な教育活動を、社会として当然の教育のあり方として認知していいのでないかというのが、著者の主張のよう。

不登校児との係わり合い方、進学問題や大人になった今の姿にも触れている。

また、スリースクールなどでの活動も、学籍ある学校の出席認定獲得への親の運動にも触れている。

更に、法の解説や、文部科学省の不登校対策の問題点にも触れ、これからのフリースクールのあり方にも諸外国の取り組みを紹介しつつ提言している。

呪縛に気づいていない学校教育関係者、呪縛に悩んでいる人は、目にして欲しい本である。

（2006 年 3 月 11 日　記）